

# ポルト市公共図書館所蔵日本関係資料について

川 口 敦 子

**要旨：**2012年9月にポルト市公共図書館で行った資料調査を基に、ポルト市公共図書館所蔵の日本関係資料の現状について報告する。所蔵されている日本関係資料として有名なキリシタン版『フロスクリ』の他、コリヤードの『羅西日辞書』『日本文典』『懺悔録』の所蔵を確認し、幕末頃の日本関係資料を閲覧した。幕末関係資料の一部については松田毅一氏が1960年に行った調査で言及されているものもあるが、その大半については所蔵の実態や書誌情報がよく把握されていない状態である。本稿では、ポルト市公共図書館に所蔵される日本関係資料について確認し、幕末関係資料の伝来について考察を加えるものである。

## 1. はじめに —— ポルト市公共図書館での調査

2012年9月、ポルトガルのポルト市公共図書館（ポルト市立図書館、ポルト公共図書館とも）Biblioteca Pública Municipal do Porto にて資料調査を行う機会を得た。当初の訪問目的は、当館所蔵のキリシタン版『フロスクリ』の閲覧・調査と、コリヤードの著作やキリシタン関係文書の所蔵調査であった。

図書館の担当者に訪問目的を告げたところ、『フロスクリ』は状態が悪くて本来ならば閲覧できないが、今回は特別に、短時間ならば、という条件付きで閲覧を許可していただいた。限られた時間で『フロスクリ』の閲覧を終えた後、古いカタログで関係資料の所蔵を確認していると、職員の方が「当館が所蔵している日本関係の文書はこれくらいだ」と、何点かの資料を書庫から出してきて見せてくれた。それらは幕末関係の資料であり、残念ながら筆者が探している種類の資料ではなかったが、聞けば「我々はこの資料について情報を持っていないので、わかるならば教えて欲しい」とのことであった。それならばと、日本古典籍の研究に携わる者の端くれとして、その場でわかる範囲で、幾ばくかの情報を提供してきた次第である。

ポルト市公共図書館の所蔵情報は、国文学研究資料館のコーニツキー版欧州所在日本古書総合目録や古典籍総合目録データベースに収録されておらず、ポルト市公共図書館でもきちんとカタログ化できていないようである。

前述のような事情もあって、今回の調査では書誌情報を丁寧に記録する余裕もなく、また筆者が幕末関係の歴史や資料に不案内であったこともあり、些か粗い内容ではあるが、本稿では詳細な書誌情報よりも資料の存在を報告することを優先したい。

以下、今回の調査で閲覧したポルト市公共図書館所蔵のキリシタン関係資料と幕末関係資料について、概要を紹介する。

## 2. キリシタン関係資料

①『フロスクリ』*Flosculi ex veteris ac Novi Testamenti, S. Doctorum, et insignium philosophorum floribus*

*selecti. Per Emmanuelem Barretum Lusitanum, presbyterum Societatis Iesu.*

著者：マノエル・バレット Manoel Barreto

刊行：1610年 長崎

所蔵番号：Y'-4-42

本編の状態は悪くないが、表紙の補強に使われた断簡（遊び紙に挟まれる形で、表紙と本編の間に綴じ込まれている）の状態が悪く、このために閲覧が制限されているのである。

表見返しおよび表遊び紙3葉裏には、記入されている旧所蔵番号 A'-9-23 を抹消して現在の所蔵番号 Y'-4-42 とある。

本資料の複製本として、マノエル・バレット編『聖教精華』（海老沢有道編「南欧所在吉利支丹集録」雄松堂書店、1978）がある。断簡は、小倉・有馬のキリシタンが1611年頃に長崎の教会に宛てた文書であり<sup>(1)</sup>、臼井真義「1610年版「フロスクリ」の表紙裏から見出されたキリシタン文書」（『日本歴史』114号、1957年12月）に翻刻がある。

## ②『羅西日辞書』*Dictionarium siue Thesauri Linguae Iaponicae Compendium.*

『日本文典』*Ars Grammaticae Iaponicae Linguae.*

『懺悔録』*Niffon no cotobani yô confesion, ... Modus Confitendi et examinandi Poenitentem Iaponensem, formula suamet lingua Iaponica.*

著者：ディエゴ・コリャード Diego Collado

刊行：1632年 ローマ

所蔵番号：J-1-69

いわゆる「コリャード三部作」である。『羅西日辞書』正篇および続篇、『日本文典』、『懺悔録』の順に合冊されている。ポルト市公共図書館のカタログには『羅西日辞書』の情報しか記録されていなかったため、今回の調査で『日本文典』『懺悔録』の所蔵が確認されたことになる。

本文の異同箇所については、ヴァチカン Barberini 本・ウルバノ大学本<sup>(2)</sup>と同系統である。

## 3. 幕末関係資料

松田毅一氏は、1960年にポルト市公共図書館で『フロスクリ』を調査した際に、その過程で「横浜開港記念文」や「村垣淡路守（範正）と竹本甲斐守（正雅）の名のある目録」といった幕末関係の資料をマニュスクリプト書庫で見つけている<sup>(3)</sup>。今回、筆者が閲覧した幕末関係資料の中には、松田氏の言及がない資料もあった。

## ③絵封筒（木箱入り）

木箱（22.3×13.8 cm）の蓋に「御封筒」「竹本甲斐守（Takemoto Kaino Kami）」と書かれた張り紙がある。木箱は中が縦半分に仕切られており、和紙の中敷きがある。木箱の右半分に27枚、左半分に23枚の絵封筒（25×5.9 cm）が収められている。絵封筒には、御簾にネコ、流水に菊と紅葉、松竹梅、月に梅、飛鶴などの彩色模様が施されている。

⑤の目録に記載のある、竹本甲斐守からの「文筒 百枚入一箱」か。

④「雁皮紙目録」(引札)

1 枚、24.1×29.5 cm

「豆州熱海今井半太夫製〈元祖〉鴈皮紙目録〈書物 雁皮紙〉〈江戸日本橋通四町目 金花堂須原屋佐助〉」

⑤「目録」

1 枚、39×98.5 cm

上包あり(表書き「目録 List.」)

「目録 contents.」(冒頭)や「以上 The End」(末尾)のように、日本語(縦書き、毛筆)に英語訳が添えられている。内容は、「右 竹本甲斐守より」として「一 釜しき紙 三枚入一箱」「一 舞扇 拾五本入一箱」「一 絵半切 五百枚入一箱」「一 文筒 百枚入一箱」、「右 村垣淡路守より」として「一 備前焼 獅子香炉 壺」「一 尾張焼 水指 壺」「一 蒔絵菓子盆 五枚入一箱」、「右 竹本隼人守<sup>(ママ)</sup>より」として「一 葉罐附火鉢 壺」、「右 阿部越前守より」として「一 錦絵 一箱」とある。

「竹本甲斐守」は竹本正雅(文政9年～明治元年)、「村垣淡路守」は村垣範正(文化10年～明治13年)、「竹本隼人守」は竹本正明(天保2年～明治32年)、「阿部越前守」は阿部正外(文政11年～明治20年)であり、いずれも幕末に外国奉行や神奈川奉行を務めた人物である<sup>(4)</sup>。

竹本甲斐守から贈られた「文筒 百枚入一箱」は、③の木箱に「竹本甲斐守」とあることから、③の絵封筒のことであろう。

⑥『御開港横浜之全図』

1 枚、69.5×192 cm (折りたたみ 23.4×16 cm)

外題：御開港横浜大絵図(表紙中央題箋による)

内題：御開港横浜之全図

作者：玉蘭斎橋本謙(貞秀)

序：安政6年 屑龍散人

出版事項：宝善堂 江戸馬喰町二丁目角 丸屋徳造蔵版

保存状態は良好で、色彩も鮮やかである。

序には安政6年(1859)とあるが、描かれている地形等から、万延元年(1860)頃の作であると推定されており<sup>(5)</sup>、本絵図には万延元年の初版、文久元年(1861)の再版、慶応元年(1865)頃の増補再版の三種が存在する<sup>(6)</sup>。本資料は増補再版とは体裁が異なるので初版か再版であると思われるが、今回の調査ではそこまでは確認できなかった。

⑦『養蚕秘録』中下巻(上巻を欠く)

25.9×17.9 cm

跋：享和2年 加藤為貞・関口源謙

中下巻ともに表紙に鉛筆書きで「Japão」と記されている。

中巻の後ろ見返しに広告「和歌御書物所 京都三條通堺町 出雲寺松栢堂」。

下巻の後ろ見返しに広告「國學御書物所 京都三條通堺町 出雲寺松栢堂」。

『養蚕秘録』は上垣守国が著した養蚕指導書で、近世における蚕業図書の白眉といわれ、シーボルトの助手ホフマン Johann Joseph Hoaffman（1805～1878）によってフランス語訳もされている<sup>(7)</sup>。

日本各地に現存する諸本には下巻末尾に享和3年（1803）の刊記があるが、ポルト市公共図書館所蔵本にはこの刊記の丁がなく、また上垣守国による享和2年（1802）の序文がある上巻も欠いているために、作者や出版年、書林などの出版情報がほとんどわからない状態である。

#### 4. 幕末関係資料の背景

今回閲覧した幕末関係資料（③～⑦）のうち、③には「Real Bibliotheca Publica Municipal DO PORTO/Papel para forrar salas e envelopes do Japão Offerta ao museo Municipal polo Ex. mo Snr Eduard Clarke, Consul de Portugal em Kanagaua - 1865」（王立ポルト市公共図書館／日本の、部屋を覆うための紙と封筒 神奈川のポルトガル領事エドワード・クラーク閣下から市博物館への寄贈品 - 1865年）と書かれたカードが添えられていた。「envelopes」は③「絵封筒」を指すと考えられるが、「Papal para forrar salas」に該当するものは閲覧した資料の中にはなかった。

④～⑦には「Real Bibliotheca Publica Municipal DO PORTO/Um Tratado de Sericicultura em Japonex Offerta do Ex.mo Snr. Eduard Clarke, Consul de Portugal em Kanagaua. 1865.」（王立ポルト市公共図書館／日本の養蚕業の説明書 神奈川のポルトガル領事エドワード・クラーク閣下からの寄贈品。1865年。）と書かれたカードと、「Real Bibliotheca Publica Municipal DO PORTO/Callitypo No. The Proverbs of Salomon (Nitidissima impressão em papel “toned”) London 1870. Spesimen de cantonagem singela mas elegante.」と書かれたカードが添えられていた。前者は「Tratado de Sericicultura」（養蚕業の説明書）とあるので、⑦『養蚕秘録』を説明するカードであろう。後者は「The Proverbs of Salomon」（ソロモン王の箴言）とあるように、日本関係資料とは関連のないカードである。

日本関係資料と関連するカードに名前がある「Eduard Clarke」（Edward Clarke）とは、1861年頃から1864年頃まで横浜に居留していた、デント商会（Dent & co.）の一員でポルトガル領事でもあったイギリス人である。J・R・ブラック『ヤング・ジャパン』には、1861年2月19日にイギリス公使の発議で開かれた公聴会における「デント商会のクラーク氏」の発言について言及があり<sup>(8)</sup>、1862年の出来事として「一八六〇年八月三日に始めて調印された日本ポルトガル条約は、一八六二年四月八日、江戸のアメリカ公使館で正式に批准され、英国領事兼外国使節のエドワード・クラーク氏に手交された」<sup>(9)</sup>ともある。A・シーボルトは父と共に日本を旅行した際、1862年に父が横浜から帰国する直前にエドワード・クラークに会っており、クラークについて次のように述べている。

私たちの友人のうちには、ポルトガルの名誉領事で、大デント Dent 商会の代表者、エドワード・クラーク Edward Clarke 氏がいた。彼は海外貿易をするイギリス貴族特有の、

そんな性格を持った人のひとりで、真面目で、信用があり、目先がきいた<sup>(10)</sup>。

(『ジーボルト最後の日本旅行』)

居留地に在住する外国人の名簿である *The China Directory* の 1862 年版および 1863 年版には、神奈川のポルトガル領事、デント商会の構成員、横浜在住のイギリス人の一覧にそれぞれ「Edward Clarke」の名があり<sup>(11)</sup>、*The Chronicle & Directory For China, Japan & The Philippines* の 1864 年版には「Clarke, E., merchant and Portuguese consul. Yokohama」(クラーク・E、商人およびポルトガル領事。横浜)と記載があるが、1865 年版には彼の名前はなく、横浜のポルトガル領事はデント商会の N. P. Kingdon となっている<sup>(12)</sup>。

既に述べたように、③「絵封筒」は竹本正雅からの贈り物であり、⑤「目録」記載の内容と一致する。これらがクラークによる寄贈品だということは、⑤「目録」とそこに記載された品々は、クラークに贈られて彼の所有となっていたものだと考えられる。

目録に名前がある人物が外国奉行や神奈川奉行の任にあった時期は、以下の通りである<sup>(13)</sup>。

- ・竹本正雅…安政 6 年 (1859) から外国奉行と神奈川奉行を兼帯
- ・村垣範正…安政 5 年 (1858) から外国奉行、安政 6 年 (1859) から万延元年 (1860) まで神奈川奉行を兼帯
- ・竹本正明…文久元年 (1861) から外国奉行、文久 3 年 (1863) からは神奈川奉行を兼帯
- ・阿部正外は文久元年 (1861) から神奈川奉行、文久 2 年 (1862) から外国奉行を兼帯

中でも竹本正明と阿部正外は、クラークが神奈川のポルトガル領事だった時期に外国奉行や神奈川奉行を務めている。目録に記載された品々は、公務で深い関わりがあった彼らからクラークへの贈り物であったと推定される。

なお、クラークは 1865 年 6 月 12 日付でリスボンからアヴィラ伯宛の書簡を送っていることから<sup>(14)</sup>、1865 年には日本を離れてポルトガルにいたことがわかる。資料に添えられたカードの「1865 年」という記録と考え合わせると、クラークはポルトガルに到着してから程なくして、日本から持ち帰った品々を寄贈したのであろう。

## 5. おわりに

今回の調査では時間の都合等で確認することができなかったが、松田氏はポルト市公共図書館のマニュスクリプト室で「錦絵が多数」あるのを見つけており<sup>(15)</sup>、それは⑤「目録」に記載されている、阿部越前守より贈られた「錦絵 一箱」に相当するのではないかとと思われる。したがって、より詳細な調査を行えば、この目録に記載された他の品も発見される可能性がある。

幕末関係資料の調査に関しては、筆者にとって予定外の思いがけないものであり、その場ではポルト市公共図書館の関係者に十分な情報を提供できなかったことが悔やまれる。本報告によって、近世・幕末の古典籍や日本・ポルトガル交渉史など関係する分野の研究者に情報が提供され、ひいてはポルト市公共図書館の関係者にも有益な情報がもたらされることを願うのである。

末尾ながら、『フロスクリ』をはじめ、貴重な所蔵資料を閲覧させてくださったポルト市公共図書館の関係者に厚く御礼申し上げる。

付記：本稿は平成23—26年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（若手研究（B））、課題番号：23720228）による成果の一部である。

## 註

- (1) 松田毅一『在南欧日本関係文書採訪録』（養徳社、1964）、p. 196。
- (2) 諸本の系統については、拙稿「コリヤード『羅西日辞書』諸本の異同一ローマ、ヴァチカンにおける調査を中心に」三重大学人文学部文化学科紀要『人文論叢』29（2012年3月）を参照されたい。
- (3) 松田前掲書、pp. 194—195。
- (4) 小川恭一編著『寛政譜以降旗本家百科事典』（東洋書林、1997—1998）。
- (5) 『日本古地図大成 解説』（講談社、1972）、「110 御開港横浜大絵図（内題 御開港横浜之全図）」の項。
- (6) 横浜開港資料館編『横浜開港資料館 資料総覧』（横浜開港資料館、2006）、p. 205。
- (7) 石山洋「解説 江戸時代の養蚕技術——『養蚕秘録』をめぐる——」、江戸科学古典叢書13『養蚕秘録』（恒和出版、1978）。
- (8) J・R・ブラック著、ねずまさし・小池晴子訳『ヤング・ジャパン 1』（平凡社東洋文庫、1970）、p. 41。
- (9) ブラック著、ねず・小池訳前掲書、p. 66。なお、訳文には「英国領事兼外交使節」（原文は「H. M. F. M. Consul」）とあるが、クラークはイギリス人ではあるがイギリス領事ではなく、ポルトガル領事である。本件の内容もポルトガルとの条約批准の記事であり、イギリス領事ではなくポルトガル領事に手交されるのが妥当である。
- (10) A・ジーボルト著、斎藤信訳『ジーボルト最後の日本旅行』（平凡社東洋文庫、1981）、p. 159。
- (11) 1863年版には横浜在住のイギリス人の一覧に記載があると同時に、横浜在住のポルトガル人の一覧にも「Edward Clarke, H. M. F. M.'s consul」の記載があるが、これは同姓同名の別人ではなく、記載の重複か誤りであろう。
- (12) 立脇和夫監修『ジャパン・ディレクトリー 幕末明治 在日外国人・機関名鑑 第一巻 1861～1875』（ゆまに書房、1996年）参照。
- (13) 注（4）参照。
- (14) Instituto Diplomático and Ministério dos Negócios Estrangeiros eds., “Ofício de Edward Clarke, Cônsul de Portugal em Kanagawa, para o Conde d’Ávila (mais tarde Marquês), Ministro e Secretário de Estado dos Negócios Estrangeiros 1865, 12 de Junho, Lisboa”, *Negócios Estrangeiros*, No. 17 Especial, Lisbon, 2010, pp. 114-117.
- (15) 松田前掲書、p. 195。